

D-2 睡眠時呼吸障害が無症候性脳血管障害および認知機能障害の進行に及ぼす影響について

獨協医科大学埼玉医療センター 脳神経内科
赤岩靖久, 沼畑恭子, 小川知宏, 尾上祐行,
滝口義晃, 宮本智之

【目的】睡眠呼吸障害(SDB)は、重篤な心血管疾患を発症しやすく脳梗塞の独立した危険因子であることが知られている。また、無症候性脳血管障害の進展に寄与することも報告されており、近年注目を集めている。当施設の脳ドック受診者における、SDBの程度と無症候性脳血管障害および認知機能低下の関連について検討した。

【方法】2016年4月～2021年3月の脳ドック受診者2764名のうち、頭部MRI・MRA、頸部血管超音波、一般身体検査、および睡眠呼吸検査を実施した、のべ1958名(平均57.6歳)を対象にした。携帯型睡眠評価装置にて、呼吸障害指数(RDI)を算出し、5未満を正常群、5以上をSDB群とし、5～15(軽症)、15～30(中等症)、30以上(重症)に分類し解析した。

【結果】初回受診者1429名のうち、SDB群は1048名(73%)であり、軽症(500名35%)、中等症(398名28%)、重症(150名10%)であった。SDB群は、正常群に比して、男性が有意に多く($p<0.001$)、年齢、BMI、収縮期血圧、中性脂肪、HbA1cが有意に高かった($p<0.001$)。頭部MRIでの大脳白質病変グレードはRDIの重症度に伴い上昇する傾向にあった。認知機能検査を行った226名(平均63.8歳)では、SDB群でHDS-R($p<0.001$)、MMSE($p=0.015$)、FAB($p=0.002$)が有意に低下しており、重症度に伴い低下する傾向にあった。多変量解析では、SDB重症度が認知機能障害の独立した危険因子であった($p=0.050$, OR2.20, 95%CI 1.002-4.835)。

【結論】本研究において、SDB群では、大脳白質病変や認知機能障害との相関が認められた。脳ドックにおいて、SDBの評価は、無症候性脳血管障害および認知機能低下の進行を早期に発見するうえで重要であると考えられた。

D-3 小児期に多い摂食症：当科における回避・制限性食物摂取症(ARFID)の臨床的特徴

獨協医科大学埼玉医療センター 子どものこころ診療センター

深谷悠太, 大谷良子, 井上 建, 大森希望,
森下菖子, 椎橋文子, 松島奈穂, 作田亮一

【背景】小児期の摂食症は増加傾向である。痩せ願望を伴わない回避・制限性食物摂取症(avoidant restrictive food intake disorder: ARFID)は2013年に初めて導入された疾患概念であり、ARFIDも増加傾向が示されている。小児科医が臨床で遭遇することも多く、さらに身体的安定化を目的に緊急入院が必要となることもあり、その臨床的特徴を知ることは重要である。

【目的】当科におけるARFIDの患者数と臨床的特徴を、神経性やせ症(AN)と比較検討する。

【対象・方法】2016年から2023年までの8年間に当科を初診した小児摂食症患者を対象とし、①初診患者数、②初診時平均年齢、③病型別患者数AN:ARFIDと割合を後方視的に抽出した。

【結果】2016年:①27,②12.7歳,③18(66.7%):8(29.6%), 2017年:①26,②11.4歳,③13(50%):13(50%), 2018年:①42,②12.2歳,③25(59.5%):16(38.1%), 2019年:①32,②14.8歳,③19(59.3%):13(40.7%), 2020年:①71,②13.3歳,③43(60.5%):28(39.5%), 2021年:①61,②12.1歳,③43(70.4%):18(29.6%), 2022年:①60,②12.7歳,③32(53.3%):27(45.8%), 2023年:①58,②11.6歳,③27(46.6%):29(50%)。初診患者数は2020年に倍増し、以後も高止まりしている。2020年、2021年はAN率が多く、2022年以降はARFID率が増加している。

【考察】2020～2021年は一斉休校の影響が色濃い時期であり、対人交流の減少や社会情勢に関連した不安がANの増加に影響を与えた可能性がある。2022～2023年は学校制限解除の時期であり、ANは減少したがARFIDは増加し続けている。不安や抑うつなどを背景に認めることが多いARFIDは、小児のメンタルヘルスの問題が懸念されるなかで、今後も増加する可能性が考えられる。